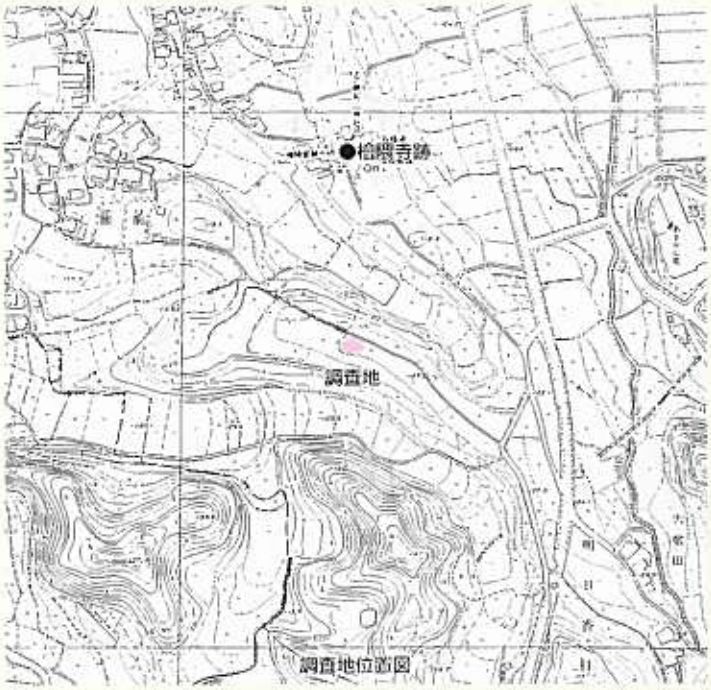
明日香村の文化財⑬

檜前遺跡群

－国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴う発掘調査－

2009年11月
明日香村教育委員会


●檜隈寺跡
調査地
調査地位置図

2008年発掘調査区(東から)

建物1
塀1
調査区垂直写真

掘立柱建物と大壁遺構(東から)

大壁遺構(東から)

大壁遺構屈折部(北東から)

大壁遺構断割状況(東から)

檜前遺跡群（ひのくまいせきぐん）

1.はじめに

檜前遺跡群は檜隈寺からキトラ古墳までの周辺一帯に広がる遺跡群の総称です。檜隈は、『日本書紀』や『古事記』の記述から渡来人が移り住んだ地域であったことがわかっています。その渡来人を束ねた渡来系氏族東漢氏が檜隈を拠点にして氏寺である檜隈寺を建立したと考えられています。『日本書紀』には、天武天皇朱鳥元年(686)に檜隈寺についての記述がはじめて現れ、7世紀後半には存在していたことが知られ、発掘成果によっても裏付けられています。

檜前遺跡群の発掘調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴って実施しています。明日香村教育委員会では、平成20年度に発掘調査を行い、飛鳥時代後半の掘立柱建物群や塀などを検出しました。これまでの成果により、当遺跡の立地する尾根上において、ほかにも飛鳥時代の遺構群が展開することが想定されました。

2.主な遺構と出土遺物

調査の結果、飛鳥時代の大壁遺構、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条が検出されました。

大壁遺構は、平面形が逆L字状と直線状の布掘り溝です。逆L字状の溝は、南北10m、東西7m以上の規模で、幅40～70cm、深さ40cmを測り、溝の断面形が方形や逆台形状を呈しています。この溝の断面には、柱抜き取り痕跡が確認でき、溝の中に柱を立てていたことがわかります。この柱抜き取り痕跡は、およそ25～60cmという不揃いの間隔で並んでいます。この溝から7世紀中頃の須恵器が出土しました。直線状の布掘り溝は、長さ4.3mで途切れてしまう断面長方形の布掘り溝です。建物1は、南北2間、東西3間の掘立柱建物です。塀1は建物1と平行して建てられています。建物1と塀1は、これまでの調査区周辺の調査から、7世紀後半頃と考えられます。

3.まとめ

今回の調査では、檜隈地域で渡来系の技術を備えた大壁遺構を確認することができました。大壁遺構は、掘立柱建物群よりも時期的に先行してつくられています。そして、大壁遺構廃絶後の7世紀後半には同位置で掘立柱建物に建て替えられたと考えられます。これまでの檜前遺跡群の調査成果から、遺跡地周辺は、檜隈寺造営に合わせるように、7世紀後半になると活発に土地の開発がおこなわれ、見晴らしの良い尾根上に掘立柱建物群が広がっていた様子がうかがえます。また、最近の発掘成果では、檜隈寺の北西部で、大壁遺構と同時期と考えられる竪穴建物のL字形カマドなどがみつかっています。このように、檜隈中枢部において、渡来系要素を示す大壁遺構が確認されたことは、檜隈地域と渡来系集団とのかかわりを裏付けるものといえるでしょう。